

カトリックダイジェスト



8月

第2巻 8月號 第8號

キリスト教傳來四百年記念特集
フランシスコ・デ・サヴェリオ
ペトロ・アルーベ

醫學の驚異クロロマイシテイン.....	29
ミケランジェロの壁畫.....	38
ビキニの實驗と原子爆彈の將來.....	44
ジャヴァの紳士達.....	53
野球若かりし頃.....	58
癩病はたして不治か.....	63
五つ子の家を訪れて.....	66
弗素の話.....	78
フランコ政権の現状.....	85
怒りの心理學.....	91
生き抜く本能.....	99

— 冷い戦争 —

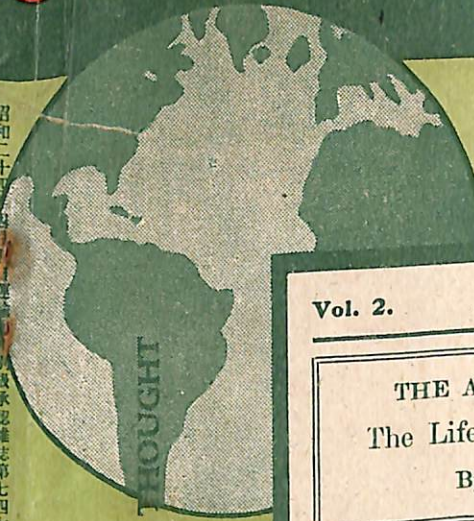
「冷い戦争」を解明する	102
冷い戦争に勝たねばならぬ	107

愛と平和に世界を結ぶ家庭雑誌

昭和二十四年七月十五日創刊
昭和二十四年八月十五日創刊
昭和二十三年五月十五日第三種郵便物認可
第二巻 第八號

一九四九年 八月號

Catholic Digest



JAPANESE EDITION

Vol. 2. AUGUST 1949 No. 8.

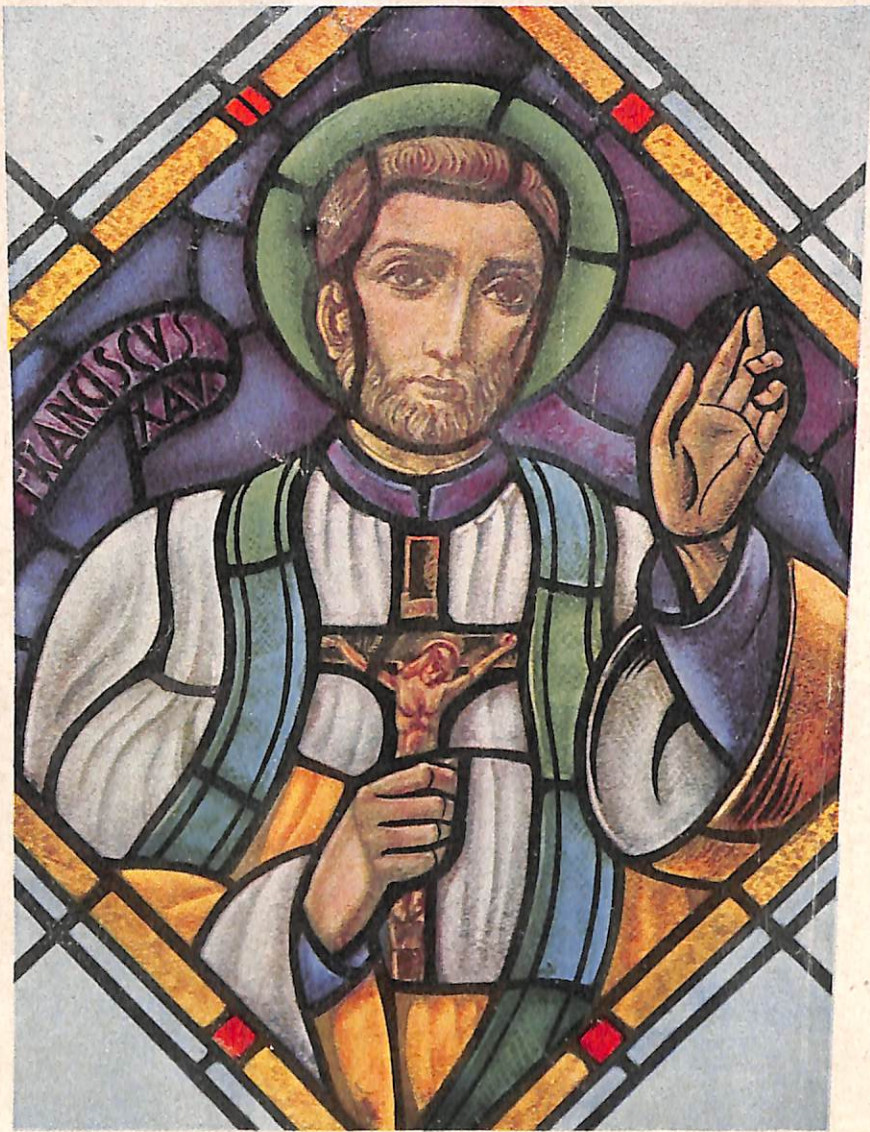
THE APOSTLE OF THE EAST
The Life of Saint Francis Xavier
By Pedro Arrupe, S. J.

The Greatest Drug Since Penicillin.....	29
Michelangelo.....	38
Bombs at Bikini.....	44
Gentlemen of Java.....	53
When Baseball Was Young.....	58
Two-Way Door at Carville.....	63
The Quints Are Dionnes.....	66
Taming Chemistry's Hellcat.....	78
Franco Still Leads.....	85
How to Manage Your Emotions.....	91
When Life is at Stake.....	99

In This Hour of Crisis:	
How We Can Win the Cold War with Russia!	102
How Blind is Russia?.....	107

¥40

THE GOLDEN THREAD OF CATHOLIC THOUGHT



フランシスコ・サヴェリオ
(東京・聖イグナチオ教會)

時 事 寸 評

共産黨に對する法的保護を失わせる事は非民主的であるか

共産主義の威嚇の増大に伴い、これに對する對策が重大な問題としてとり上げられて來たが、これを主として軍事的立場からのみ考えることは誤りである。現状においては、より政治的な緊急問題として共産主義の脅威を有効に防禦する對策が考へられねばならぬ。しかし、そこに一つの懸念が生じ得る。即ち共産黨は民主主義の原則による思想の自由、意見發表の自由、出版、集會、結社の自由等の民主主義的な制度を使用して、これらの民主主義的な制度を破壊せんとしている。共産黨に對してこれらの權利自由を否認することは民主主義の自滅ではないか。共産主義の警察國家同様反動的警察國家も亦民主主義と矛盾する。本國に發表された「冷い戰爭に勝たねばならぬ」の中でユリツク・ジョンストンは、その問題の解決法を、「分らない」と歌じている。

一つの方法是共産黨に對する法的保護を失わせることであろう。それが實際有効かどうか。地下に潛入した共産黨は、地上の共産黨より有害ではないかといふ疑問は別にして、果してこのように共産黨に對する法的保護を奪うことが、民主主義と矛盾するかどうかを明かにしよう。

そもそも政黨とは何か、政黨結成の可能性は何故に生ずるか。その問題に對する解答は自ら、政黨の民主主義的機能にも明かにする。政黨といふ言葉は、國會議内のグループ、政黨幹部、その他黨内の宣傳情報に専門の業とする人々、正式に成る政黨に對し黨費を拂う人々、或る政黨の綱領に賛同し、その指導者に従つて、その政黨に

投票する人々、等種々の意味に使用されているが一般的にいへば、國家内に於て同一の政治的陳情と目的を以て、國家の政策に影響を興え、政權又は勢力を得んとするグループをいふのである。次にこのような政黨が何故に國家内に出来るのであるか。制度としての國家そのものは、自然法に基き、その權限、その目的に關する一般原則が定まつているが、具體的政治、政府の機構、分權等については歴史的に形成されるものであり、又自然法に基き一般原則に従つて、共通善といはれる國家の目的は、具體的情況において何を要求するかという問題を別個に決定せねばならぬ。その目的に對して如何なる具體的手段を用うかは、一般原則には必ずしも一定しない。歴史的に實現すべき國家の目的、具體的に使用する手法等については市民が種々の意見を有し得、その相違に従つて、同意見の人々が一つの政黨を結成する可能性がある。

けれどもかくの如き市民の集團も、國家に對する市民の義務を逃れ得ない。又國家そのものを認めるや否やといふことも政黨の意に委ねらるべき問題ではない。政黨は市民の集りであつて、國家にとつて最善の形かどうかという問題はある得もあるし(終戦後の日本)暴力主義の政府に對し國民の幸福を革命的手段で回復し得る場合もある(アメリカ革命)更に既存の國家形態を更に適宜な國家形態に變えんとする場合(所謂ヨーロッパ)

ツ(合衆國問題)もあるし、既存の國家を分割せねばならぬといふ場合(南北戰爭)も起り得る。けれどもかくの場合の根本問題は、新しい政治形態が國民の幸福に必要であるかどうかによつて解決せねばならぬ。若し然りとせば、その爲に政黨の運動が可能となる。何れにしても國家そのものの存在を否定するものではない。

國家そのものの防止をマルクス主義の理想目標として掲げてゐる。然りとせば、市民の根本義務、即ち國家を維持する義務を捨てて、國家そのものを否定するグループであり、前の意味での政黨とは異つた團體といわれねばならぬ。

眞の政黨(マニ)は常により大きい全體の部分(マニ)であり、他の政黨と共に一つの政治的全體を構成せねばならない。政黨の追求する目的が全體の目的であり、例え特定のグループの利益を代表するにしても、それが全體の爲に重要であり、その特定のグループの利益が全體の共通善のために必要なるが故にその利益を主張し得るのである。これに反し國民全體から遊離したグループを代表し、その所謂利益を、全體に反して實現せんとする團體は「政黨」とはいえず、「敵」といわねばならぬ。共産黨の所謂プロレタリアートは共産思想によれば、國民の一部ではなく、國民全體から遊離し國民を征服せんとする政治的異分子である。従つて共産黨は他の政黨と共通の地盤を有し得ない。それは民主主義の原則に従つて構成された國民の一部分ではないから、共産黨に對して普通の政黨と同一の權利、同一の自由を認め得ない。共産黨に對する政策は、國民の敵に對する政策と考へねばならぬ。

オランダのサヴェリア



ペトロ・アルーベ



少年時代のサヴェリオ (1512年)

フランシスコ・デ・サヴェリオ

生い立ち

イ
 スパニヤの北、フランスとの國境に、ナワラという町がある。そこにサヴェリオという町があり、城が屹立していた。現在は、これが立派な聖堂になっているが、一西紀一五〇六年四月七日、この城の中に呱呱の聲をあげたのが、フランシスコ・デ・サヴェリオであつた。この上に貴族の生れであるサヴェリオは、自分としても貴族の華やかな生涯を理想としていた。それがひと度、神からの召命にあずかるや否や、——『神の召命』とは、神からの特別な大きな恩寵である。——喜んで神の思召に應じ、自分の野心を悉く放擲して神の使徒となり、神に奉仕し奉ることを以て生涯をつらぬいた。そのサヴェリオの臨終の地は支那廣東沖の三洲島であつたのだから、今に至るまでサヴェリオの姿は、印度と極東との二つの世界をかき抱くようにして立ち續けているということが出来る。

第十六世紀の生んだ偉大な人物の一人とし

て、フランシスコ・デ・サヴェリオを擧げることにおいて、反對を唱える人は、恐らく一人もないであらう。

幼年時代は貴族の若様として何の不自由もない生活の中にあつたが、六歳のころ、大きな急變に遭遇した。フランスとイスパニヤとの間に戦争が勃發したのである。しかもその目的は、兩國ともナワラ地方を確保するにあつた。ナワラの領主やサヴェリオの一家はフランス軍の味方をした。處が間もなく、ナワラ地方はイスパニヤ軍の占領するところとなつたため、領主は亡命し、サヴェリオ一家は没落の悲運に陥つた。サヴェリオは經濟的にも大いに不自由な身分となつた。それだけに、家と國とを興せよという願望が猛烈に湧き上つて來たのである。しかしサヴェリオは初めから兄達のような軍人の道は選ばなかつた。既に父はボロニヤ大學から博士號を贈られた人であり、従兄にはその名を廣く内外に轟かれた法學博士のナワロがあつた。そしてまたサヴェリオ自身も學問が好きであつた。それで、彼も學問を以て身を立て家を興せよと志したのであるが、父に緣故の深いボロニヤ大學などを目指すことなく、いきなり、當時の最高峰たるパリーのソルボンヌ大學に入學するのだと言ひ出した。家庭の人々は、經濟上の犠牲を厭わず、遂に彼の志望に許しを與えた。こうしてサヴェリオは十九歳の時、華の都のパリーへ出て來た。だが、その場合

も相變らず貴族生活が付きまとい、一人の下男を従え馬に乗つて出かけたのである。前途は洋々たるものがあつた。

寮生活

大

學へ入つて見ると、そこには歐洲の各國から三千人の學生が集まつていた。パリーの町は、ナワラの町とは比較にならないほど大きくて賑かであつた。一つの寮に落附いた彼は、學校の講義も、まるで渴した者が水を呑むように熱心に勉強した。何か即答を命ぜられるような場合があると、いつでもサヴェリオが一番先に、一番適切な返答をしたという。セイヌ河の島上でスポーツがあると、サヴェリオはほとんど片づけしからそれに加つた。體格にも恵まれていた彼は、そのいずれにも、優秀な技倆を示し、間もなくスポーツの方でも中心人物となつた。その明朗な性格は人々から愛され、交際も仲々廣くなつた。これだけを考へても、彼が如何に愉快な、満足な日々を送つていたかを想像することが出来る。

しかし二十代の青年時代は、男子の動物時代だといふことが出来る。頗る危い時期である。何の思慮もなく直接行動に祖し、破壊的な作業に加わつて快感を感じるのも、この時代の事である。心身の清純な誇りを弊腹の如く棄て去つて、悪逆びを覺えるのも、此の時代の事である。果して

サヴェリオだけがその危険の埒外にあり得いであらうか。寮の生活は頗る嚴重であつた。夜、外出したり、或は外泊した者は、笞刑の制裁を喰つた。けれども動物はどこまでも動物であつた。窓から脱け出して扉を乗り越え、悪所通いをする者が、決して絶えなかつた。しかもパリーの町は悪所には不足しなかつた。

こゝろい連中が、とうとうサヴェリオに目をつけて仲間引つぱり込んだ。その中には學生を指導するはずの若い哲學の講師すらいたのであるから、サヴェリオは頗る安心した。皆と一緒に鼻歌まじりでスタコラ窓を脱け出した。ところが或る日、この仲間や講師の顔に妙なものを発見した。いやらしい腫瘍が吹き出していたのである。紛うかたなき花柳病であつた。愕然とした。新米のサヴェリオは幸にしてまだ貞潔の罪を犯すまでには進んでいなかつたのである。それ以來サヴェリオは、窓脱けをふつとりと止めた。よほど驚いたと見えて、随分後になつてもなお此の時の話を親しい友人に打明けている。然しそれも尤もな事で、若い講師はその後間もなく死亡した。あれといこれとい、サヴェリオにとつては大きな神の恩寵であつた。その上、悪逆びの講師の代りに品行の極めて端正な高德の講師が監督の地位についた。サヴェリオは以來學業に専心した。けれどもそこには、また別の大きな危険が潜んでいた。

當時はカトリック信仰に服することが世人の常識になつていた。殊にフランスやイスペインに於て、その感が深かつた。そこへドイツからルターのおゆる『宗教改革』と

自稱する革命運動が起つて來た。標榜している所は『宗教改革』であるけれども、實は教會の破壊を意圖するものであつた。従つてフランスもイスペインも、その侵入を嚴重に警戒して、感染分子は國外に放逐する手段をすらすら探つた。處がその頃、ソルボンヌ大學では、人文主義の講義が、絢爛たる詞藻を以て、若い人々を魅了していたのであるが、この講義の中にいつしかルターの革命思想が滲入して來た。つまり教授の中に、『宗教改革』派が現われたのである。まだカトリック信仰の深さも解らず、人生に就いての経験らしい経験もなかつたサヴェリオは、それが破壊思想であることを知るよしもなく、一途に景氣のよい講義に心惹かれてしまつた。この種の危険の切迫は、今の日本の學生達の状態によく似ている。

いずれにしても、これは決して天國への道ではなかつた。折角裏まれたサヴェリオの才能も、いたづらに身の破壊を招くべき思想的頓落への道に墮するのではないかを、怖れなければならぬような様相を呈して來た。

丁

度その頃のことであつた。寮の同室生として、サヴェリオの處へイグナチオ・デ・ロヨラなる者が入つて來た。サヴェリオが漸く二十歳を少し過ぎたばかりであるのに、この男は三十八歳だと言つた。見ると全くの弊衣破霜で、その上足が悪かつたから、風采の上らないことに實に夥しかつた。貴族生活のサヴェリオは此の男を頭から輕蔑した。そして何か話す機会があると、自分の赫々たる將來の生活を、得々として語つて聞かせた。イグナチオはそれをいつも黙々として慎んで聽いていた。けれどもそれがたび重なる時、イグナチオはこんな句をつぶやき出した。『人若し全世界をもりくとも、己が魂を失わば、何の益かあらん。』これは聖書の句である。全世界を足下におくつもりはサヴェリオにとつては、これは決して面白い句ではなかつた。腹が立つと部屋を飛び出し、或は又呵々大笑して、ぐるりとイグナチオに背を向けた。

處がそのイグナチオが、不思議な力を持つていた。此の大學の學生三人ばかりがイグナチオに感激して、その言葉に従い、自分の書物や持物をすべて賣り拂い、その金を貧窮者に分け與え、自分等は施療病院の一隅に置いてもらつて、日夜患者の奉仕に献身し始めた。他の友人達は大いに驚いてその施療病院に驅けつけ、強制的に、ほとんど腕力をふるわんばかりにして、漸くこの三人を大學へ引きずり

もどしたという。そのイグナチオは苦學生であつた。休暇中にベルギーやロンドンあたりまでも出かけて往つて、學費を拵えていた。それにも拘らず、誰か金に困つてゐる友人に出會つと、その苦心慘澹たる金を悉く惜し氣もなくその友人に與えて、急場を救うのをつねとしたという。イグナチオは、いつでもはだしで歩いてゐた。餘りみつともないので友人達が彼に靴を履かせた。以來彼は靴を履いてゐたけれども、どうも様子が變なもので、よくしらべて見るといつのまにか靴の底を抜いてしまつてゐたという。此の大學では古來からの慣例として、日曜の朝は討論會が催されることになつてゐた。イグナチオは一人その慣例に猛烈に反對し數名の友人を誘つては討論會の代りに、近くの教會に赴き、ミサ聖祭にあずかり、聖體を拜領した。これは當時のバリーに於ては前代未聞の信心であつた。従つて人々は、彼を以て異端者だと考へた。また寮としても、幾度忠告したか判らないのに、頑として聽従せず、反對の行動を敢て取るのであるから、寮の規定に従ひ、全學生の前でイグナチオを答刑に處することとなつた。けれどもイグナチオは手を拱いて答を待つことの愚を思い、その直前に寮長の處へ行つて、自分の意見を忌憚なく陳べた。全學生はホールに集まつて、時間の來るのを待つてゐた。やがて、寮長がイグナチオをつれて入つて來た。ホールには緊張が漲

つた。間もなく激しい答のうなりが聞かれることと思いきや、それこそ前代未聞の光景が展開された。答を振るべき寮長が、制裁を受ける筈のイグナチオの前にやうやうしく跪坐してしまつたのである。それからイグナチオに慣んで無禮を謝し、一同に向つて『イグナチオ君は、異端者どころではなく、全く聖人である』と宣言した。不思議な人物である。

恩寵の訪れ

れにしても、サヴェリオには一向何の興味も湧かなかつた。相變らず下男を使つての貴族生活を續けて得々としてゐた。家名を立て、國を興して何事も思ふ儘になるはずの華やかな將來は、既に目前に迫つてゐた。けれども現在、家庭の經濟は決して豊かではなかつた。サヴェリオのすべての要求には應じ兼ねたのであるから、サヴェリオも費用に窮する場合が増して來た。すると殆どその度毎に、あの輕蔑すべきイグナチオが、びつこをひきながら現れては多額の金をくれた。お蔭でサヴェリオは何の不都合をも來たすことなしに濟んだ。その内にサヴェリオは哲學科を了えて、哲學の講師となつた。頗る得意である。しかし新米の講師の講義などには、學生がさつぱり集らなかつた。これにはサヴェリオも閉口した。するとまた

ちんばのイグナチオがそこらを駆け廻つて、學生の間を宣傳し、多數の學生が聽講に來るよりに斡旋してくれた。

こんなことが三年も續いた。氣がついて見ると、まだその外に陰になり日向になつて、破壊的な異端思想の誘惑を退け、サヴェリオの信仰の純真性を無疵の儘に守つてくれたのもイグナチオであつた。さすがのサヴェリオの傲岸な頭も、次第にイグナチオの前にさがつて來た。それもその

靈操

つた。その時までにイグナチオのもとに集まつてゐた他の五人の同志と共に、イグナチオに導かれて、モンマルトの聖堂に往き、貞潔と従順とを以て、生涯神に奉仕奉るといふ誓願を立てて後は、急に、學校の講義を中止すると言ひ出して同志達を大いに手古摺らせたくらいである。

はずで、實は神の恩寵が、イグナチオという人物を通じてサヴェリオに注がれていたのである。神は彼をお召しになつていたのである。イグナチオは疾つくからそれを看破してゐた。此の虛榮心の強い傲然たる人間が、ひと度神の恩寵に對して扉を開くならば、世にも稀な偉大な魂が生まれ來ることを鋭く感じてゐた。キリストの戰士として、神への奉仕に生涯を捧げてゐたイグナチオは、しきりに同志を求めてゐた。ソルボンヌ大學へ來たのも一つはその目的のためであつた。偉大なる魂の獲得のためには全力を擧げて闘つた。それが三年かかろうとも、十年を要しようとも厭うところではなかつた。こうして彼は、サヴェリオに兜

よいよアリストテレスの講義も一段落を告げ、學校が休暇となつた時、イグナチオは、彼獨特の有名な「靈操」をサヴェリオに行わしめた。「靈操」というのは、「糺明・默想・觀想・口禱・念禱、及びその他の靈的動作のあらゆる方法」であつて、一般にはこれを默想と呼んでゐる。體の健康を保つ方法を體操といふのと同様に、靈魂を健全ならしめるあらゆる方法の集積である。

獨りあばらやに引き籠つたサヴェリオは、イグナチオの指導のもとに、四十日の間、此の靈操に服し、そのうち四日間、跪坐したまま全く斷食したほどに精魂を傾けた。

これによつてサヴェリオは、人生に就いての考え方を根本から訂正し、瞭然たらしめることが出來た。先ず第一の問題は、「自分は何のために生まれて來たのか」であつた。その答は極めて簡單であつた。「主なる神を讚美し、敬い、これに仕え奉り、それによつて己が救靈を全うするために

神から造られた」のであつた。その道は、神の召命を自覺したサヴェリオに取つては、その召命に應ずる以外にはなかつた。そしてこれがまた人生に於ける最高の道であつた。

するとイグナチオは、「フランシスコよ、この理想から観れば、あなたの今までの生活はどんなものであつたか。」と質問した。サヴェリオは深く反省せざるを得なかつた。殆ど罪にばかりまみれて来た自分の浅はかな姿が浮かんで来た。神から聞せらるべきは自分の自分は、反對に大きな恩寵に接したのである。その時イグナチオは、サヴェリオの目前に十字架につけられたキリストの像を置いた。自分が救われ、その上神の恵みにまで接することの出来るのは、ひとえにキリストの犠牲によることに相違なかつた。自分は此の限りなきキリストの愛に對して何をして来たことであらうか。自分は非常な裏切者ではないか。その償いの意味から言つても、自分は當然その生涯をキリストに捧げるべきである。それでも到底償うことが不可能なほどに、キリストの愛は大きい。しかしキリストの満足を得るために働こう。そのキリストは何をお望みになつて居るのであるか。イグナチオは、聖書の句に従つて、それを明らかにしてくれた。即ち「我が志すところは、全世界と凡ての敵を我に従わしめて、御父の光榮に入ることに在り。されば

我れと共に來らんと欲する者は、我と偕に働かざる可からず。故に困難を我と偕にせる者は、光榮に於ても、亦、我れと偕に在らん。」

キリストは、十字架に釘づけられた神人である。何のためか？ 我等の靈魂を救わんがためであつた。キリストの満足を望む自分は、キリストと共に十字架につけられなければならぬ。それこそ無上の光榮である。人の靈魂のために生命を捨てたキリストと共に、自分も人の救済のために生命を捧げよう。若くして純眞なサヴェリオの胸には、殆ど無條件に、キリストのもとに馳せ參ずるのだ。」

四十日間の黙想が終つたとき、サヴェリオはまるで別人になつていた。自分の身の名譽のみを思ふ虚榮心の體化のよりなサヴェリオが、今はキリストの戰士として、全世界の哀れな靈魂のために、最後の血の一滴までも捧げ盡すことを切望する人となつていた。

これである。サヴェリオの本當の偉大さは實に此の變り方にあつた。此の決心にあつた。此の決心を生涯つらぬいた點に在つた。

サヴェリオの業績に驚歎する人々は、あの新大陸の發見者コロンブスと比較して論じたりしている。或は、當時の頗る覺束ない交通機關に依りながら、その旅程の廣大にわと從順との誓願に、なお聖地エルザレムへ巡禮するといふ一項をも加えていた。若しそれが不可能の場合には、教會の首長であり、キリストの代理者たる教皇聖下の輕騎兵として働くことに意見の一致を見た。雪の山路を越え、敵の迫害にはいよいよ勇氣を増し、目指すイタリヤに來て見ると、ヴェネチアとトルコとの間に戦争が起り、船が缺航してしまつたので、聖地への渡航が不可能となつた。そこで一同は、教皇聖下の前に伺候して、聖下直屬の輕騎兵たるんことを願ひ出た。喜んでこれを嘉納せられた教皇は、彼等が一人又は二人ずつに別れて、イタリヤの各地で働くことをお命じになつた。この時には同志の數が始ど倍になつていたのである。彼等は日々パンを民家の門に乞ひ歩くという、全く清貧の生活に甘んじながら、病人の看護に奉仕したり、街頭に立つて説教したり、少しも身を勞る時間すらない使徒活動を一年ばかりも展開した。すると、一五三九年に至り、彼等の評判を聞いたポルトガル王ジョアン三世は、重要な植民地たる印度の布教に、彼等を派遣されることを教皇聖下に願ひ出た。彼等の内六人で行つて欲しいという王の希望を使節は固く主張して、イグナチオを困らせた。イグナチオは遂に悲鳴を擧げ、「それなら閣下は、他の全世界のためには、何人残しておいて下さるお積りで

たこのを見て、當時の同國人ニルカノと並び稱する人もある。そう言えば、サヴェリオを冒険家と見て、コルテスやピサロの列に加えることも出来るし、開拓者として、初代印度總督たるアルブケケの右に置くことも出来る。しかしこれは極めて皮相な一面觀たるを免れない。サヴェリオを論ずる限り、彼の本質を擲んだものでなければならぬ。それは偏にキリストの戰士たる點にあつた。従つてこの點に卓拔な業績を認めることが出来てこそ、彼に頌詞を贈ることが正當となるのであつて、キリストの戰士とは、換言すれば人間の眞の寶、永遠の寶を倦まずたゆまず人々に教へ示す者である。こゝに秀でて居ることは、即ち神への奉仕に徹しているからであつて、これは聖人にして初めてよくすることの出来ることである。一言にして盡せば、サヴェリオの偉かつた點は彼が聖人であつた點にある。

イエズス會

生

まれかわつたサヴェリオとイグナチオとは、それ以來、同じ目的のために一身を捧げて永遠に結ばれた。二人の外になお五人の同志があつたので、一同はキリストの十二使徒と全く同じ生活を送ることに決めた。この七人の一團こそ、今、全世界にその旗幟を押し進めて到らぬ限りなき『イエズス會』の誕生であつた。彼等は、貞潔

すか」と言つた。この眞情の籠つた言葉が功を奏し、二名

だけの派遣を以て承引を得ることが出来た。使節の希望したのは、同じポルトガル人たるロドリゲスと、火のようなイスパニヤ人ポバデアであった。イグナチオの急報によつて、布教地から歸つて来たロドリゲスは、ひと足さきに船に乗つて、ポルトガルの首都リスボアに向つた。他の一人たるポバデアは、容易に姿を見せなかつたので、使節は出発の日を三月十五日と決めて待つて居ると、その前日に至つてポバデアは高熱に悩む重態の身を、漸く一同の前に現わした。これでは到底長途の旅行に堪え得るものには無かつたから、イグナチオは直ちにサヴェリオを呼んで「フランシスコよ、此の事業はあなたのものだ。」と言つた。その時のサヴェリオの答は今に至るまで頗る有名である。言下に、「宜しいとも」と言つただけである。大旅行を明日に控えていながら、そして心の「父」たるイグナチオとはこれが生涯の別れとなるかも知れないのに、他に一言も言わなかつた。サヴェリオは、どこまでも無條件にキリストの戦士であつた。そこに一片の「私」もなかつた。

急いで教皇の前に伺候して、その報告を行い、祝福を受けた後歸宅すると、いそがしく着物をつくろつた。もう日が暮れている。

明くれば、使者の一行に加わり、聖務日書を書ぶところに、扁幅を飾らず、平常着一枚だけのサヴェリオは、暖か

は、現代の我々の想像をはるかに絶するものであつたに違いない。それでも彼は寢ていたのではなかつた。讀出する病人の看護を始め、船員の衣類の洗濯までやつて人々を助け自分が倒れるのも厭わなかつた。

印度に着いたのは、西紀一五四二年五月六日のことであつたが、その後の彼の活動は實に目まぐるしいものであつた。ゴアに上陸した彼は三ヶ月の後はツテコリンにいた。その十二月には再びゴアへ歸つて来た。翌年の一月にはコテンへ行き、二月にはプニカレ、三月にはまたツテコリン、四月にはリブル、五月にはナル、一五四四年には、マラバルとツテコリンとの間を巡回し、四五年には、ネガバタンやサン・トメにまでも足を伸ばしている。このように活動に次ぐ活動を行つて、その報告が全歐洲を湧き立たせたほどの大きな收穫もあり、もし協力者さえ充分来てくれるならば、これを十倍にも二十倍にもすることが出来ると思はれる。サヴェリオはバリーを始め、歐洲の諸大學へ乗り込んで、大聲叱呼せずにはいられない衝動に驅られた。能力と環境とに恵まれながら、自分一個の虚榮心に奉仕し、以て學問をその具に供し、敢て人の救済のことなど考えもせぬ若人達、思えば遺憾やる方なかつた。けれどもそうこゝろする内に、深い祈りに恵まれていた彼は、神の攝理に導

い神の攝理に包まれて、馬の手綱を握つていた。

リスボアから印度行の船が出るまでには、なお一ヶ年を待たなければならなかつたので、その間、ロドリゲスと一緒に王の宮廷付司祭として働いた。すると王は船の出帆の日が近づくに従い益々固く二人を留めて、手離そうとはしなくなつてしまつた。此の二人は、印度よりも、ポルトガルにいて欲しいといふのである。その結果、教皇やイグナチオまでが心配して、折衝を重ね、漸くロドリゲスが宮廷に留り、サヴェリオ一人印度へ渡ることになつた。彼には「教皇使節」という特別の資格が與えられた。

不思議なことに、船がともづなを解いたのはサヴェリオが丁度満三十五歳の誕生日たる、一五四一年四月七日のことであつた。七百噸ばかりの船に乗り込んだサヴェリオは彼を敬仰する雲の如き人々の歡聲に送られながら、靜かにリスボアの港を離れて行つた。

印度

リスボアから印度に達するまで、約一ヶ年を要し、小さな船に人々をすし詰めにするこの時分の航海は、毎日苦痛の連続であつた。キリストの十字架の道を歩むサヴェリオですら、たゞの一日でもあの様な日から逃れることが出来たらと誓いたのであるから、その苦しみ

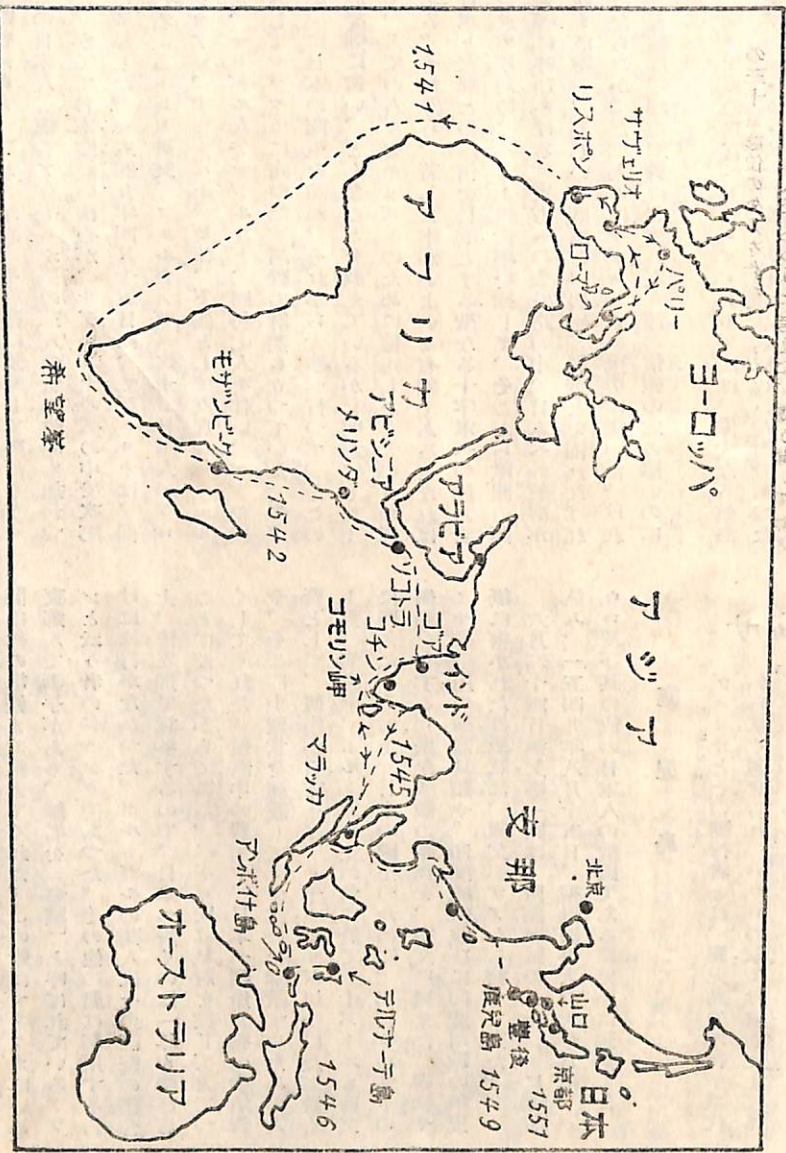
かれ、遂に印度を離れてマラッカにまで来てしまつた。教會の先驅者であり、東洋の使徒たるサヴェリオの英姿が、次第に明かになつて来た。こゝで初めて、當時明國であつた中國の内部の様子を聞いたのである。眼を輝かせたサヴェリオは、更に詳細な情報の蒐集を友人に依頼して、自分は所謂マルコ地方に往き、回教徒との戦の計畫を立て、次にはモロ島に渡つた。これは實に大變なことであつた。此の一事を以てしても、彼が如何に篤く神の恩寵に守られた聖人であつたかを、推知することが出来る。モロ島は首狩族のいる所であつた。毒薬を使用し、むやみに人を殺す。一日中誰にも出會わなければ、自分の妻や子供すら殺すといふ。人々は無論極力反對した。けれども一旦それが神の聖旨であることを識つたサヴェリオに取つては、危険などは眼中になかつた、と云つてしまえばそれまでであるが、サヴェリオ自身の言葉によると、渡航の時間が切迫するにつれて、眼前は眞暗になり、日夜つねに反復していた聖書の句、「己が魂を保つ人はこれを失ひ、我がために魂を失ふ人はこれを保たん、(マテオ、三九)」の意味すら、何のことも解らなくなつてしまつたといふ。従つてサヴェリオは、尙更、不思議な態度をとつた。人々が頻りに持つて來てくれる解毒劑を一切拒絶したのである。蠻行の明かな島に、敢て單身渡つて行くのは決して冒險を好むからではなく、

やはり救霊のためであり、神への奉仕のためである。守つて下さるのは神である。ひとえに神への信頼の故に行くのである。解毒剤などを身につけているとそれだけ神への信頼の念が分散することになる。それが一番危険であり、一番怖ろしいことであつた。モロ島には、一人で三ヶ月の間滞在していた。小舎に宿ることが出来ても、いつ何時寢首をかゝれるか知れなかつたけれどサヴェリオはよく熟睡した。生活必需品すらなかつたのであるから、その苦しみは實に大であつたが、同時に、止め度もなく流れ落ちて失明するかと思われたほどの涙をどろすることも出来なかつたほどに、神の恵が大であつた。しまいに彼はモロ島を、「神への信頼の嶋」と呼んだ。モロ島に来て、一層神への信頼に徹することが出来たからである。而もこれは東洋の使徒たるべき訓練を、神がお與えになつたのだと解する外はなかつた。

日本の招き

一 五四七年十二月の終り頃サヴェリオがマルコ地方(モルツカ)からマラッカに歸り、その山上にある聖母の小聖堂にいた時、彼の友人であるポルトガル船長が一人の三十五歳の外人を伴つて、這入つて来た。サヴェリオはこれが支那人であらうと考えた。處が聞いて見る

と、名をアンヘロといい、五年ほど前に發見された日本という國から来た者で、片言まじりのポルトガル語を話す。國で人を殺して追われ、このポルトガル船に逃げ込み、一五四六年、マラッカまで連れて来てもらつた。若いとき犯した罪が彼の心を苦しめているのを見てとつた船長は、人が「聖人の靈父」と呼ぶサヴェリオ神父に會うことを懇めた。來て見ると、運悪くサヴェリオ神父はマルコ地方へ出かけて不在であり、マラッカ司教代理神父は、せつかく洗禮を授けても、アンヘロは間もなく異教徒の國へ歸るのだからという理由で洗禮を拒否した。悄然として歸路に遇いた彼は、故山が眼の前に見えている處まで來て暴風に遇い、支那へ吹き返され、そのポルトガル人の忠告に従つて、再びマラッカへ來たのであるが、今度は目指すサヴェリオ神父に會うことが出来た。八日の後サヴェリオはインドへ歸つた。けれども此の短い期日の間に、彼が日本に就いて船長を初めアンヘロから聞いたことは、靈魂を探し求めて此の使徒の眼前に、全く新しい世界の展望を繰り擲いたのである。住民の多い大きな國、教養の高い文化國民、知識慾が旺盛で、理性的な話に耳を傾けると云うのであるから、声印度の教養のない漁夫達とは、まるで違つている。キリストは自分を正にこゝへお呼びになつて居るのだ。その後更に日本に關する新しい報告に接した。その



サヴェリオの足跡圖

上、洗禮を受けたアン（ロ）（靈名パウロ）と、その下僕（靈名ジョアン）と、なお、その後には渡航して来たもう一人の日本人（靈名アントニオ）の三人の者の説明も加わつた。かくて日本渡航の決心が、サヴェリオの魂の中で次第に成熟した。一五四九年四月十五日に、サヴェリオは、同行者たるトレス神父、フェルナンデス修士、日本人パウロジョアン、アントニオ、及び、下僕として支那人マヌエルと、マラバル人アマドルなど、同勢七人を伴ひ、ゴアを出発してマラッカに向つた。活動の計劃も立つてゐた。先ず第一に日本の國王を訪ね、それから大學へ行つて、そのの教授達に會ひ、どんなことを教えているかを明かにした上で、凡ての人々をキリストのために獲得しようといふのである。それから、若し日本がいよいよ有望であるとすれば日本と支那との歸信を目的とする聖なる十字軍への協力者を求めるため、パリーの大學を通じて、そこから歐洲の諸大學に呼びかける。東方への全航路の中、日本への航海が最も危険で、烈しい季節風と、岩礁と海賊とを怖れなければならなかつた。人々はサヴェリオの蠻勇に驚いた。けれども彼は、却つて神に對する友人達の信頼の念の薄いのに驚いた。

マラッカの長官ベドロ・ダ・シルヴァ氏は、偉大なる航海家アスニョ・ダ・ガマの息子としてふさわしい人物であつた

から、非常な熱意を以て靈父を支援し、僅かに二日ほどの間に船の準備まで整えてくれた。この船はマラッカにいる支那人で妻子があり、綽名を「海賊」と呼ばれているアアンと云う者のジャンクであつた。その他の船は利用するわけには行かなかつた。ポルトガルの商人はその商賣の都合上、皆支那で越冬するので、日本へ着くのは一年も延びることになつたからである。ベドロ氏は私財を投じてまでつくしてくれた。航海中の費用や、日本へ到着當初の生活費や、そこに小聖堂を建設してミサ聖祭を奉獻するための入費として、價格から言へば、一千クルサド以上に及ぶ最も上質の胡椒を、ポルトガル王の名に於て三十バールも靈父に與えた。その上、日本の國王のために、二百クルサドの價額を有する立派な多數の贈物を、靈父に與えた。書物やミサ聖祭用の聖器具類や、印度總督並びに印度司教の羊皮紙に書かれた推薦狀は、靈父がゴアから持つて来た。

六月二十四日靈父等一同は、所謂海賊のジャンクに乗り込み、一五四九年八月十五日、聖母被昇天の大祝日に、パウロ及び其の他の日本人の故國である鹿兒島に到着した。

鹿 兒 島

サ

ヴェリオとその隨行者とは、鹿兒島の奉行や城代から厚く遇せられ、パウロの家では賓客としても

てなされた。パウロの暗い過去は忘れられた。彼の家は朝から晩まで好奇の眼をみはる訪問者を以て充たされた。人は、パウロの白い客人やその黒い下僕が見たかつたのであり、まだ日本人の誰一人として往つたことのない、遠い南蠻の仙境の話が聞きたかつたのである。

また薩摩侯島津貴久も、鹿兒島から五哩離れたその城へ、パウロが訪ねて行つて印度の話をした時、非常な興味を以て聞き入つた。しかしサヴェリオ靈父の眼には、日本人がどんな風に映つたであらうか。

市 來

冬

が訪れて来た。サヴェリオはその間、豫定のとおり日本語の勉強と、パウロの助力のもとに、信仰簡條を日本語で書くことに費した。と同時に、布教への努力も決しておろそかにはしなかつた。信者になる者が次第に數を増して行つた。パウロの熱心のお蔭で、洗禮を受けた者の數は、百名にまでもなつた。鹿兒島から北西へ、徒歩で約七時間の處にある市來城の城代家老は、鹿兒島で説教をきき、洗禮の時にミゲルと云う靈名をもらつた。彼は城主伊勢守ニイロウの家臣であつた。城主には二人の夫人と、數名の子供と、多數の家來とがあつた。サヴェリオがその市來に出入して、一人の夫人と、その子供とを始め

家臣の一部に至るまで、總數約十五名の者に、洗禮を授けることの出来たのは全くミゲルの熱心のお蔭であつた。城主はサヴェリオを敬待したけれども、自らは信者にはならなかつた。そうこうするうちに春が来た。都へ上るのに都合の好い東風が吹き始めた。しかし、貴久は、信仰の使者を留めて、北國は戰亂の巷と化しているし、平和が訪れて來ない限り、旅へ出ることは思いもよらぬ事だと言つた。所が夏になつても平和は來なかつた。その中に鹿兒島に於ては、迫害が始まつた。佛僧等は此の新しい教義に、妥協の餘地のないことを漸く悟つたのである。彼等は佛門の信徒の改宗を押しとどめ、貴久を煽動した。神々の懲罰が侯に下るのであるらし、國の滅亡を怖れなければならぬと云るのである。僧侶の威勢は強大であつたから、貴久は彼等の所見に讓歩した。そして死罪の刑を以つて、今後新しく信者になることを禁止した。一五五〇年六月の終り頃一隻のポルトガル船が、九州の北西部の平戸に着いたという報告がもたらされた時、サヴェリオは鹿兒島に留まることと、十ヶ月餘に及んでいた。暑い上に、靈父は、當時熱と食慾不振とに悩んでいたにも拘らず、只一人の下僕を通譯として伴ない、直ちに、平戸に向つて出發した。ポルトガル人は非常に喜んで靈父を迎えたけれども、靈父が期待していた印度や歐洲からの手紙は誰も持つていながつた。一

ヶ月の後、サヅエリオは僚友の處へ歸つて來た。けれども鹿兒島には最早や長く居られないことになつた。それで靈父は、平戸から都へ上る計劃をたて、貴久に對して、同行者と共に平戸へ行く許可を願ひ出した。貴久はそれに對して願覆しそうな小舟を一隻用立て、くれただけであつた。サヅエリオが新しい信者達に別れを告げた時、皆涙を流して今までの親切を感謝した。それをあとにして靈父は、八月の終りに、トレス神父、フェルナンデス修士、ジョアン・アントニオ、ベルナルド及びアマドルを伴つて、旅に出た。

山口

小

舟による平戸への渡航は、波が高いのと、海賊が多いのと頗る危険であつた。平戸には二ヶ月滞在した。更に小舟で平戸を立つて博多に着く。博多から陸路、箱崎、香椎、古賀、福岡、東郷、赤間、小倉、門司を経て、下関、豊浦、小月、埴生、厚狭、船木、嘉川、小郡を通つて山口に着く。雪に掩われた凸凹のひどい山路の旅は、難澁を極めた。村に來ると、子供等は石を投げつけて嘲笑した。日が暮れる頃には、靈父等は疲れ果てていた。旅宿に着いても、貧弱な家であるから、刺す様な北風に對しては何の防ぎよりもなかつた。その上にサヅエリオは、

けた。靈父等は、また多數の高位者の家に招かれた。その中の或る者は、熱心な智識者からであり、或る者は單なる好奇心、或は暇つぶしからであつた。面白がる者もあり、同情を寄せる者もあり、また輕蔑する者もあつた。けれどサヅエリオは彼等を相手とする術を心得ていた。若し高貴な身分の者が横柄な言葉を使つた場合には、靈父はフェルナンデス修士に命じて、同じ横柄な言葉を以て答へさせた。従つて悚然たるこの通詞は、靈父が殉教を求めているに違ひないと考えた位であつた。或るとき招かれた邸で修士が、悪魔ルチフェルの顛落と、傲慢な者の永劫の懲罰との條項を朗讀した時、その主人が嘲笑し、愚弄したので、靈父は烈々たる威嚇の顔を上げながら、「たとえ貴下がそれを望まなくとも、貴下が自ら抑制して謙遜の徳を持たない限り、永劫の苦惱に陥る以外はないであらう。」と言つた。それから修士に向つて「私たちが死を怖れていないことをみせてやろ。そしてこの傲慢な人々に、私等の優れていることを示そ。見なさい。如何に彼等は坊さんを尊敬しているかを。若し彼等が坊さん以上に私等を尊敬しないとすれば、彼等は決して私等の教義を受け入れることはない。」と言つた。このように、家の中や街頭で説教を行うこと數日に及んで後、漸く義隆自身が靈父等を自宅に招いた。侯は當時四十三歳で、藝術家、詩人、學

なお自己に依る禁慾の業をきびしく課していた。道中靈父は風寒に氣をとられず、たゞ祈りに沈潜し、旅宿では誰からも後指をさへれないように、肉類も魚も採らなかつた。

山口への途中で、三人の者が信者になつた。高齡の武士と一組の夫婦とである。山口には、有力な諸侯の一人、大内義隆の居城があつた。その邸内には藝術家や學問と共に、凡ゆる悪徳もまた榮えていた。町には、木造家屋ばかり一萬戸以上あり、華麗な寺院や神社だけでも百以上に及んでいゝた。靈父等は内田と云う人の家で旅装を解くと、直ぐに福音の説教を開始した。毎日二度ずつフェルナンデス修士と共に、人出の多い街頭や十字路に立つた。先ず初めに修士が例の「翻譯」を朗讀するのであるが、第一には世界の創造を説き、それに附隨して、日本人の三つの主要な罪を數えあげた。それは偶像の崇拜と、亂倫と、幼兒殺しとであつた。次に靈父が説教するのであるが、その時には、靈父の顔は熱心の餘り、火の様に赤くなつた。その言葉はフェルナンデス修士が次から次へと通譯した。毎日場所を變えたので、間もなく、少くとも賑かな街では、神の言葉の告げられなかつた場所は一つもない程になつた。外國の「坊さん」の話をきくために人々は大勢押し寄せて來た。或る者は靈父等を狂人だと云い、或る者は何かによかれていたのだと考へた。彼等は盛んに靈父等に罵詈雑言を浴びせか

者、並びに僧侶の保護者であつたが、同時に生活は非常に奢侈で、特に不自然な罪に身を持ちくずしている人であつた。先ず挨拶として渡航のことを始め、印度や歐洲に就いての質問があつて後、侯は靈父等が説教している新しい捉のことがききたいと望んだ。そこでサヅエリオはフェルナンデス修士に命じて、例の翻譯を讀ませた。義隆はそれを注意深く、一時間以上もきいていた。大部分を讀み終つた修士は、つぎに當時の日本人の重大な悪徳たる亂倫の章に移つた。そこには、「この罪を犯す者は豚よりも汚らわしく、犬や其の他の畜生よりも、更に下等である。」と説かれていた。この時、修士の眼には、義隆の顔が一瞬にして色を失つたように見えた。けれども、義隆は己を制していた。一言も口を利くことなく、サヅエリオを案内した家臣に對して、目顔を以つて謁見の終つたことを知らせた。修士は義隆が彼等を殺害せしめるのではないかを、怖れた。然し別に何事もなかつたので、靈父等は今まで通りに布教を續けた。フェルナンデス修士がキリストの苦難の章を讀む時、或る人々は涙を流した。信者になつた者は僅か數名に過ぎなかつたが、その中の第一人者は、靈父の宿の主人夫婦であつて、洗禮の時、一人はトメ、一人はマリアといふ靈名をいたぶいた。布教の効果は、先ずこの位のものであつた。従つて靈父は臨誕祭を迎える八日前に、二人の同

行者を伴つて都への旅路についた。その第一行程としては日本の國內をよく識るために、山越しの陸路に依つた。雪が深くて、所によつてはそれが膝以上に達した。また水のよりに冷い河を徒渉しなければならなかつたこともしばしばであつたが、水は膝を没し、時には帯にまで達した。従つてサヅエリオは跣で歩くことが多く、日が暮れて旅宿に着くと、足から血が吹き出していた。夜の寒さは格別ひどいので、それを防ぐために、靈父は疊を取つて自分の身體の上に置いたことすらあつた。何しろ靈父とフェルナンデス修士との二人に、一枚の古毛布しか無かつたからである。このような辛苦艱難を極めた山越しの旅を數日つづけ水上、長野、宮市、富海、戸田市、福川、徳山、櫛ヶ濱、下松、玖珂、岩國、を経て宮島へ出た。そこから渡し舟に乗り、堺に向つた。約三週間というもの、船は帆に風をはらんで、嶋の多い瀬戸内海を進んで行つた。靈父等は同船している若い商人達から一番悪い場所を與えられて、嘲笑されながら、晝も夜も甲板の上において、霞まじりの北風に吹きさらされ、海の幅の狭い所に來ると、海賊を怖れて甲板の下へ押し込まれた。當時、日本に於ける最大にして最も富裕な商業都市である堺に舟が着いた時、靈父と主人の同行者は上陸した。しかし、船中で靈父等に同情した商人が紹介してくれた家は、仲々見つからなかつた。下賤な者

達からうるさく悪罵を浴せられながら、町はずれの住吉神社の松林の中へ入つて夜を明かした。勿論、こゝでも子供等に嘲笑され、石を投げつけられた。翌日また探したあげく、漸く目指す家を探し出すことが出来た。その人は工藤と云い、こゝで靈父等は、客人としてもてなされた。工藤氏は間もなく、都へ上る一人の貴人を紹介してくれた。貴人は小姓や下郎につきそれぞれ、駕籠に乗つて出かけた。十入哩の道程は、その大部分を驛足で、二日にして往き切つた。道は深く雪に掩われていたが、サヅエリオは今までとは打つて變つて愉快そりに、僚友と共に、跣で下郎達の間に伍して走つた。頭にはシアムの線なし帽をかむり、林檎を空中に投げ上げたりなどして、眼には感涙を一杯ため、日本國王の宮廷で、聖なる信仰を告げるべき機會を神が彼にお與えになつたことに對して、衷心から感謝していた。

京 都

一 五五一年一月の半に、王城の地である都に到着した。見渡す限り黒い屋敷の海であり、雪に掩われた高い山に取り圍まれ、大きな寺や、何層にもなつている塔が聳え立ち、直角に相い交わる眞直ぐな通りが涯しもなく續いている。けれども、其處此處に黒く澁けくすれた廢墟のあることは、不穩な世相を物語つていた。サヅエリオ



舟で雪の澁川を下るサヅエリオ (1551年)

は比叡山の大學を訪ねようと試みた。けれども徒勞であつた。贈物のない限り、坊さんは誰一人通してくれなかつたのである。そこでサヴェリオは直ちに都に引きかえし、日本の國王に謁して、國內に於ける宣教の許可を得ようとした。貧困の極に陥つた日本の國王は、百姓家にも等しい古い木造の家屋に住み、宮廷としての威厳もなければ、何等の華麗さもなかつた。サヴェリオがフェルナンデス修士と一緒に、弊衣破帽で皇居の支關に現われ、拜謁を乞うた時贈物がなければ拜謁のかなわぬことが教えられた。その上靈父等の聞いたところに依ると、今日日本に於ては、誰も國王に従う者はないのだから、王の許可を得た所で何の價値もないと云うことであつた。都には大きな市街戰の起るような暗雲が低迷していた。こんな状態では、布教の基礎を築くことなど考えることも出来なかつた。故にサヴェリオは都へ到着してから十一日の後には、鳥羽の町端れで舟に乗り、淀川を下つて堺に歸つた。小舟が悠然と川を下つて行く間、靈父は臆目もふらず不幸な王のいる都を見詰めていた。

靈父は直ちに計劃をすつかり改めた。山口には國王よりも有力な大名がいる。そこへ訪ねてゆくことにした。但し日本人にはまだ十字架の清貧が解らないのであるから、今度は貧乏な修道者としてではなく、推薦狀や贈物を持ち、

じよりに、物を明瞭に見る事が出来るもの(眼鏡)、平滑な品物でそこには少しの影もなく、顔が映るもの、(鏡) 贅澤に裝飾され、三つの銃身を有する火繩銃、非常に美麗な水晶ガラス數箇、緞子製品、ポルトガルの葡萄酒、書籍、繪画、コーヒー茶碗等であつた。義隆は親書にも、贈物にも非常に満足した。その返禮として數々の品物を取り揃え、それに小判や大判をそえて靈父に與えようとした。しかし靈父は厚く禮を述べただけで、それらの凡てを固く辭した。その代りに只一つの好意を願つた。それは山口でキリスト教を布教し、信者をつくることの許可であつた。侯はこの願いを喜んで聴き入れ、直ちに町に布告し、この新しい掟の宣教と、それに歸信することを許可する旨明示し、家臣等に對しては靈父に害を加えてはならないと命令した。更に侯は靈父等の住居として、無住の寺を與え、贈物に對する返禮として、坊さんか又は俗人を印度へ送りたいという希望を述べた。義隆の布令が出てからはこの外國の説教家達は、今迄と全くちがつた眼で見られるようになった。朝から深夜に至るまで、靈父等の住居は好奇の眼をみはる訪問客で一杯になつた。武士、凡ゆる宗旨の坊さん、比丘尼などを始め、商人や、その他の民衆に至るまで押しかけて来るので、家から人が喰み出していることも珍らしくなかつた。際限もなく質問が浴せられ、一日に二度行わ

修交の使節としての威容を整えて行くつもりである。そこで三人は堺から乗船して更に西に下り、三月の始めに四月半不在にした平戸に歸つて來た。

再度の山口

ト
レス神父はその間、無爲に日を送つていたわけではなかつた。四十人の日本人に洗禮を施したのである。平戸に歸つた靈父は多數の贈物を船に積み、フェルナンデス修士やベルナルド等と共に山口へ出發した。四月の終り頃、今度はポルトガル人等が寄贈してくれた上等の着物を着用して、駄馬に荷物を積み、印度總督の使節という資格で、再び大内氏の居城を訪れ、謁を願ひ出た。それが許されたので、靈父は羊皮紙に美しく書かれた二つの手紙を侯に渡した。一つはゴアの司教からのものであり、他の一つは印度總督からのものであつた。それから靈父は總數十三箇に上る高價な贈物を差出した。その中には日本人が未だ曾て見たことのないものが多かつた。例えば、大きな箱の中に精巧なゼンマイ仕掛が入つていて、それが規則正しく十二部に分れ、正確に晝と夜とを示すもの(時計)、一つの機械に十二の絃があつて、別に手で、かき鳴らさなくとも五週期に十二の音を出すもの(音樂時計)、二つのガラスがはめ込まれてあつて、それを用いると、老人が若い者と同

れるのを例とする講義には必ず討論が附隨していて、これが長時間つづけられた。靈父の學識には人々が皆驚歎した。何事に對しても靈父は答える事が出來た。地球の形、星の運行、月の變化、日蝕と月蝕、彗星、雷鳴と稲妻、雨、雪、霞などの問題である。これらの被造物の話から、靈父は萬物の創造主であり、人間の靈魂の永遠の目的たる神の話に導いて行く。どちらの話も、聽衆にとつては全く耳新しく、奇であつた。坊さんの説くところに従つて、この世の凡ては海上の泡沫の如く、生滅常なきものと考えられていたからである。

神と靈魂とについては、次から次へと、むつかしい問題が提出された。そもそも創造主は善か悪か。若し善ならば何が故に惡魔だとか、貧困とか、嚴重な掟とか、人間の弱さや、永遠の地獄などという悪いものを造つたかという類である。辛辣な討論は特に禪宗の知識僧から提出された。靈父はその爲に殆ど寢食の時間を奪われ、聖務日暮や、黙想や、ミサ聖祭を奉獻する時間もなかつた。そうしていつか二ヶ月半たつたけれども、別に信者になるものもなかつた。ところが或る日フェルナンデス修士が街頭に立つて説教していると、通りかゝつた者の一人が、修士を聽衆の笑ひ者にするつもりで、顔に唾を吐きかけた。然るに修士は唾毛一つ動かさず、ハンカチを取出し、恰も顔の汗を拭う

が如くそれを靜かに拭き取り、平然として説教を續けた。この自己抑制の態度を見て聽衆は、こり云う人物を造りあげる宗教こそ屹度よいものに違いないと考えた位に、強い印象を受けた。その中の一人は、早速靈父の處に来て教を乞ひ、邊に洗禮を受けた。張りつめていた厚い氷は、とうとう破れたのである。その後信者になる者が日毎に増加して来たが、眞先に洗禮を望んだ人々は、前に説教や討論の時、最も激しい反對論者となつていた人々であつた。けれどもまた反抗氣勢も起つて来た。靈父が曠野から第三回目の謁見を許された時、侯の側を決して離れることのない眞言宗の坊さんの一人が、靈父の説く「萬物の創造主」たる神について數々の質問をし、この神には形や色があるかと訊ねた。靈父は神には形もなく、何等の色もない、純然たる實證であつて、凡ゆるものの創造主であるから、それらのものは別のものであると説明した。するとその坊さんは、更にこの神はどこから来たのかと尋ねた。そこで靈父は、自分自身から出たのであつて、萬物の原理であるが故に、無限の力を有し無限に智であり、善であり、始めもなければ終もないと答えた。坊さん達はこの答に満足しただしく、靈父に向つて、言葉や衣服こそ違つてはいるけれども、教義の内容に至つては眞言宗と同じであると云つた。その結果、眞言宗の坊さんは、靈父をその寺に招き、非常

に尊敬して接待した。それというのもこの外國の説教者によつて、自分等の宗旨がますます顯がり、大變得になるに違いないと喜んだからである。

靈父の方では、反對にまた仰天してしまつた。一體こゝにキリスト教の精神が保持されているのであろうか。使徒聖トマが、その信仰を交那や日本にまでもたらしたのであるうか。そう考えざるを得ないほど、坊さんの所にはキリスト教的なものを發見することが出来た。例えば珠數、十字架のしるし、乳香、聖祭用の衣裳、合誦祈禱、鐘、祭式の類であつて、眞言宗の主神である大日は、ゴアでアンヘロが語つていた通り、時には三つの頭を以て示されていて、身體がない。これは三位一體を表現しているように思われる。それで二三日後、靈父は自分の日本語の許す限りにおいて、坊さんに向つて三位一體のことから、キリストの托身や、その贖罪の死について質問してみた。すると坊さん達はそんなことは一切知らないばかりでなく、それを荒唐無稽のつくり物として大いに笑つた。これまで靈父は神の譯語として、大日という言葉をを用い、夜、山口の町を歩きながら、「大日を拜め」と叫んでいた。ところが今はこの言葉が問題となつて来た。新しい信者の中には多數の武士もいて、漢字の知識に富み、色々の宗旨の教義にも通じていた。その武士達の教える所によると、眞言宗の大日

は、抑々個格的な神ではなく、その意味はたゞ事物の物質的な根元であつて、第一質料とも云うべく、更にこれには淫猥な意味すら含まれているという。今や靈父には惡魔の欺瞞が明かとなつた。卽座に意を決してフェルナンデス修士と一緒に街へ行き、今度は「大日を拜むなかれ」と叫んだ。それ以後、誤解を避けるために、神のことをいつでもラテン語のまゝに「デウス」と云つた。従つて、眞言宗との交友關係が消えてしまつたのは當然のことである。陣營は二つに別れ、戦いが始まつた。靈父は新しい信者から、坊さんの不道徳な生活について一層詳しいことをきき、なお、法華、一向、淨土、眞言、禪、などの九つの宗旨のことや、神道の教義も識ることが出来た。佛教の主たる釋迦と阿彌陀とが、同じく人間を救わんがために、一千年以上にわたつて苦行を行つたという話もきいた。こうして靈父は彼等の經典の中から、この反證を集めることが出来たので、彼等を倒すのに、彼等自身の武器を用いた。坊さんと比丘尼との怪しからぬ陰事を暴露した。また靈父は、

坊さん等が人々に高價に賣りつけている魔法の札の如きは、坊さんに生活費を稼がせるだけで、地獄から人を救い出す力など微塵もないのだと宣言した。何となれば、地獄は永遠のものだからである。坊さんは防禦陣を張つた。彼等は最も機智に富んだ代表者を送つて、この外人學者の矛

盾を、指摘することにした。けれども、靈父は討論によつて、彼等を悉く沈黙せしめた。すると町は恐ろしく動搖し始めた。人々は今まで、佛教の各宗旨のどれが優れているかについて議論したものであつたが、今ではどここの家へ行つても、新しい信仰についての話ばかりであつた。坊さんに對する人々の尊敬心は減退して、布施があがらなくなつた。それで山口に在る百ほどの寺の多數がすつかり空家になる時も、遠い將來のことではないと考えられるようになった。

坊さんは騒ぎ出した。そして、靈父等は人肉を食い魔法を使うなどという途方もない煽動の説教が始められた『彼等のデウスとは、新奇な、きいたこともない代物で、非常な悪鬼であり、彼等兩蠻人はその弟子である。皆さんは注意しなければならぬ。この悪鬼はデウスといい、ダイウツと云うのであつて、大いなる嘘のことである。もし日本においてデウスが拜まれることになれば日本は滅びるのである。』

けれども坊さんが躍起になつて騒げば騒ぐほど、キリスト教信者が増して来た。二ヶ月の間に早くも五百人を突破し、この大部分が侯の家臣であり役人であつて、しかもその數は日々増加して行くばかりであつた。坂東の大學で勉強し、山口切つての最大の學者と云われていた人が信者に

なつた時の如きは、皆睡然とした。他の一人の信者は廿五歳の半盲の琵琶法師で、殆ど吹き出したくなるような容貌の持主であるが、日本の神々の歴史に通曉し、鋭い理解力を持つていた。外人達が何千哩の波濤をけたてゝはる／＼日本へ来たのは、ただ信仰を宣べ傳えるためである由をきいてひどく感激し、今後は商賣を止めて自分も同じ使命に終始しようと思つた。靈父は彼に洗禮を授け、ロレンソという靈名を與えた。その他にも信者にならうとしている者があつた。その中には内藤という者がいた。彼は淨土宗の信徒であり、多数の寺院を寄進したほどの輪依者であつて、町の富豪の一人であるが、今度妻女と共に、キリスト教に對して非常な好意を示した。山口のこの若い信者たちは靈父の心を聖なる喜びで満した。彼等の知識慾といひ信仰に對する熱意といひ、更に信仰の使者に對する彼等の心からなる親切、他の同胞をも信者にしようとする彼等の熱心、不信者との討論に勝利を得たことを靈父に報告する彼等の喜悅、これらのことが靈父をして凡ゆる犠牲や困苦缺乏をも悉く忘れさせた。これらの新しい信者はその信仰を捨てるよりも、むしろ死を選ぶ者であることを靈父は確信することが出来た。

豊

後

僚友達と共に、祝祭日の裝飾を施したボートに乗つて岸に上り、見惚れている人垣の中を、堂々と列を組んで侯の邸に乗り込んだ。靈父は最高の敬意を以て侯から迎えられたが、數物の敷いてある床の上に、ポルトガル人等がその高價なマントを擲げ、おしげもなく其の上に靈父を坐らせた。事は邸内の一同に、大きな感銘を與えた。大友義鎮は今年二十二歳の弱冠で、少し前に邸内に起つた謀叛のため殺害された父のあとを繼いで、領主となつたばかりであつた。

府内には數年のあひだ、ポルトガルの一商人が住んでゐた。この人は日本語の話が出来たし、朝毎に一冊の本を持つて祈り、夕刻にはロザリオの祈りを誦えていた。或る日義鎮はこのポルトガル人に會つて、一體あなたは日本の神を拜むのか、それとも佛か、と尋ねた。すると彼は微笑して、私は天と地との創造主であり、世界の救世主である神を拜んでいるのだと答えた。これが義鎮の氣に入り、外人の信仰が善いものゝように思われて來た。それでキリスト信仰の説教を、喜んで靈父に許可し、なおポルトガル王と友交關係を結び、印度總督の所へは使節を派遣したいといふ希望を述べた。もし靈父が永く自分の處に留まつて下さるなら、それは自分の最も欣快とする所であり、靈父が豊後にいる限り、有りと凡ゆる手をつくして歡待し、決して不自由はさせないということであつた。しかし、キリスト

靈

父が山口に居ること四ヶ月に及び、宣教活動が盛んに行われていた時、一隻のポルトガル船が九州の北部沿岸に到着した、という噂がこの地方に傳つて來た。間もなく使者が來て、豊後の大友義鎮からの手紙を靈父に渡した。噂の船がその領内の港に到着した事を知らせ、或る事についてお話がしたいから、當方を訪ねて下さらないかと書かれていた。靈父は豊後に行くことに決心した。

豊後に向つたのは、九月の半頃であつた。豊後侯が信者になるかどうかを見るためであり、ポルトガルの商人に祝儀を授けるためであり、彼等から歐洲や印度からの手紙を受け取るためであつた。この旅には通詞として、日本人ジョアンを伴い、なおベルナルドと、もう一人、山口の新しい信者でマテオという者をも連れて行つた。この二人は印度や歐洲へ行き度いと願つたからである。船で往くこと六日にして沖の濱に着いた。こゝは豊後の港である。ポルトガル船は祝砲を撃ち、橋頭旗をひるがえして靈父を迎えた。船長は熱心なキリスト信者であつたばかりでなく、靈父が印度にいた時分からの古い友人であつた。船長はポルトガル人が如何に神父を尊敬しているかを、日本人に示したかつたのである。豊後侯の居城のある府内は、そこから約半時間ほど河の上流にあつた。船長はポルトガル人とその奴隸とを従え、皆最も高價な衣服を着、靈父およびその

教信仰と、その掟とを自分が受入れることに就いては、勿論この若い領主は早急には決定することが出来なかつた。というのは、まだ安定していない自分の地位が、この事によつてますます危くなりはいないかを怖れねばならなかつたからである。

そうこうしている中にも、靈父は渡航して來たポルトガル人のために働いた。船長の外にもう一人の靈父の知人が彼等の中にいた。フェルナオ・メンデス・ピントといひ、山口に教會を建てる費用として、三百クルサドを貸してくれた。日本人に對しても、靈父は通詞の助けで説教を行つた。遂に數名の者を信者に出した。

ポルトガル船には、歐洲や印度からの手紙は一通も托されていなかつた。靈父の落膽は想像するに餘りある。靈父が一五四九年の聖母被昇天の祝日に、鹿兒島に上陸して以來、マラッカから日本へ歸た船は一隻として手紙を持つていたものがなかつた。而も靈父はゴアやマラッカばかりでなく、その他の地方に於ても總て手紙を凡ゆる手段を遣つて送りつけようとして、上長者の悉くに念を押して頼んでおいたはずである。しかも靈父が日本にまわいた三人の神父は、一人も來なかつた。その理由は何であるか。一體何事が印度に起つたのだらうか。印度布教の上長者であるサヴェリオは凡てを明かにしなければならぬ。殊に、願

い事の起るような数々の根拠があるに於ておやである。それで靈父はポルトガル船の出發を見送つてから、山口へ歸るつもりであつたのを變更して、豊後から直ちに印度へ行く決心をした。印度へ行けば僚友達を訪問して必要な處置をとり、日本に適した宣教師を自分で選び、凡てが希望通りに進めば、一五五年の八月には再び山口に歸ることが出来る。

靈父は最初の便を利用して、家や教會を建てたためにメデス・ピントから借りた三百クルサドと、自分の決意を書いた手紙とを山口の僚友の所へ送つた。すると十月の終り頃、トレス神父とフェルナンデス修士との返書を持ちアントニオがやつて来て怖ろしい事件を報告した。山口は叛徒の占領する所となり、義隆は自殺し、布教者達はやつと死を免かれたと言うのである。詳細は手紙とアントニオの話とで知ることが出来た。それに依ると、靈父が山口を出て後、坊さん達は大敵がいなくなつたのであるから、今だとばかりに攻撃を開始した。家では再び討論が始まつた。それは八日乃至十日位も続いた。フェルナンデス修士は、それを日本語で書き記して、質問と答との詳しい記録を作つた。またトレス神父も審問の結果、却つて五十人以上を信者にすることが出来た。その頃町には戦いの噂が擴まつた。坊さんや武士達は靈父の家にはつたりと姿を見せなく

なつ。僅か數名の商人と女達とが来るけれども、日の暮れない中に愴怛として歸つてしまふ。

九月二十七日には、大内氏の家臣中で最も有力な陶晴賢が、兵を率いて町を襲うという報告が来た。將軍と豊後館からの使者を迎えて饗宴を張つていた義隆はこの報告に驚いて、家臣を連れて邸を脱け出し山口の北西の山中にある寺にのがれた。九月二十八日、神父等は、重要な器具や書類を安全な場所に移し、兵亂の巷をくぐりぬけて、内藤氏の家まで運れた。内藤氏はその容進による寺の一つに案内して二日の間かくまつてくれた。その間、町は叛徒によつて占領されていた。掠奪が始まり、多數の武士の家や寺院が炎上した。敵に包圍された義隆は遂にその幼児と共に自殺した。この恐怖の數日の間、人々は信仰の使者を限なく探し求め、これを殺そうとしていた。と言うのは、彼等は神佛に背いた説教が、凡ゆる不幸の原因であつたと考えたからである。内藤氏は義隆が遁走して後、神父等を再び貰うことと、神父等に一軒の家か、或は新しく建築する場所を譲られんことを願ひ出るつもりだと手紙に書かれていた。また若しこの許可が與えられなければ、此の國に再び

領主が定まり、またサザエリオ靈父が印度から歸つて来るまで、内田トメの家を宿とし、ひそかに布教する覺悟である。義隆の家臣は多數殺されたけれども、キリスト者であつた者は一人も殺されなかつたと書いてあつた。このように山口での布教の將來は一見暗澹たるものがあつたけれども、やがて陶氏の使者が豊後へ来た。大友義隆の弟晴英を迎えて、山口侯とすることを願ひに來たのである。大友侯はこの提案を承諾すると共に、侯も晴英も神父等を援助することを固く約束した。

これで靈父は安心して印度へ旅立つことが出来る。たゞ義隆は、靈父が別れを告げた時、非常に残念そりであつた。それで侯は一人の武士を使者として靈父に従わせしめ、印度總督に贈る高價な武器一揃と、交友を求める親書とを持たせ、更に同じ親書をポルトガル王にも宛て、これには信仰の使者を當方へ派遣されるように乞うた。靈父はこの使者の外になお教養のある日本人を數名、印度及びポルトガルに伴いたかつたのである。けれども、山口のキリスト信者は海上の危険を怖れ、坊さんも危険な旅に出るよりも、壘の上の安易な生活の方を好んだので、靈父はベルナルド、マテオ、ジョアン、アントニオの四人を通して往く

だけで、満足する外はなかつた。前の二人は印度と歐洲とを訪ね、歸つてからその見聞を報告するのが希望であり、

後の二人はサザエリオを始め、一年後に來朝する管の神父等の通詞として、奉仕するのを意願としていた。

三 洲 嶋

十一月の半頃、沖の濱を船出したジャンクは、間もなく下關海峡を過ぎ、やがて日本の山の姿がサザエリオの眼界から消えてしまつた。靈父は來年再び日本の土を踏むつもりでいたけれども、神の攝理は、他の道をお開きになつたのであつて、靈父にとつてはこれが日本との永遠の別れになつた。

途中廣東沖の三洲嶋に寄港した時、ポルトガル切つての大實業家たるディオゴ・ペレイラに邂逅し、廣東の獄舎に囚なされている一人のポルトガル人から届けられた密書を見せられた。何気なく讀んで見ると、拷問の連続ともいふべき廣東の獄舎の無残な有様を叙し、切々たる救援の願ひを述べ、今、國を閉鎖している支那へ入國する手段は、ポルトガル王が修交使節を支那皇帝のもとに派遣する以外にはない、と書かれていた。これが靈父の辿るべき道をつつかり變えてしまふ機縁となつたのである。

靈父は、天來の聲を聞く思ひがあつた。同胞を救助すると共に、支那への布教の道を開くことが出来るのだ。是非これを實現せしめたいと考えた靈父は、その計畫をペレイ

ラに相談した。するとペレイラは一議に及ばず、双手を擧げて賛成し、一切の費用を自分一人で引き受けるとまで言い出した。そこでゴアに歸着した靈父はその計畫を印度總督にまで申し出た。總督も靈父の意見に賛同し、ペレイラを支那派遣の使節に任命した。ペレイラは非常に喜んで支那皇帝への高價な贈物をととのえ、自分の優秀な持船をも提供した。もし支那をキリスト教に歸信せしめることが出来れば、日本の布教も容易に進捗する筈であつた。何故なら、日本は何かにつけて支那を師匠と仰いでいたからである。靈父の胸は希望に湧き立つた。しかしマラッカに来て、ペレイラの船に荷物を積み始めた時、計書を水泡に歸せしめる致命的な障害が惹起した。時のマラッカの司令官アルプロ・デ・アタイデが、ペレイラの名譽を妬んでその船を押収してしまつたのである。靈父は強硬に談判した。破門の教會罰を以て迫つた。然しアタイデは反省することなく却つて靈父を侮辱し、町の者を煽動して靈父を迫害した。

これは靈父にとつて生涯で最も大きな苦惱であつた。靈父のために、色々の人達が司令官への忠告の勞をとつた。しかしアタイデはますます意地の悪さを發揮するばかりであつた。その間サゼリオは祈りに終始した。深夜に聖堂で祈つてゐるいたましい靈父の姿を、人々は毎日のように見

たのである。何を祈つたのであろうか。使徒の妨害をしたアタイデに下るべき重い天罰は、靈父の眼には既に瞭然としていた。従つてその天罰の輕からんことを敵のために祈つたのである。また破産に瀕する大打撃を蒙つたペレイラのために祈つたのである。後にペレイラの損失はポルトガル國王が賠償し、司令官は牢獄に投ぜられ、癩病に犯されて牢死した。それはとにかくとして、マラッカの苦惱の日が二ヶ月も續いて後、ようやく靈父一人だけが、而も使節としてではなく、一介の布教の神父として渡航することが出来ることになつた。靈父は困難が大きければ大きい程、その困難を醸し出す悪魔を耻じ入らしめずにはいられなかつた。かくて再び廣東沖の三洲島に來た靈父の困苦は、まさにその絶頂に達した。嚴烈な冬が訪れて、密貿易の人々すら皆この島を離れ去り、食糧も甚だ乏しくなつて來た。靈父はどんなに焦慮したことであつたらうか。潜入の船を待ちつゝかなたの空を眺めやり、ひたすら廣東・廣東と呼びつゞけているうち、遂に高熱を發して倒れた靈父は、一五五二年十二月三日の早曉に、十字架を手に持ち、おだやかな顔で天上に向けて不歸の客となつたのである。思えば終始一貫、これ神への奉仕であつた。神はこれ以上の困苦をお許しにならず、無限の慰めをお與えにならなかつたために靈父を御自分のもとにお呼び寄せになつたのである。

新

発見の薬が現在、實地に試験されている三つの場景を心に浮べてみよ。この薬は、醫學界に於て今やペニシリン以後の最大発見となりそうなのである。

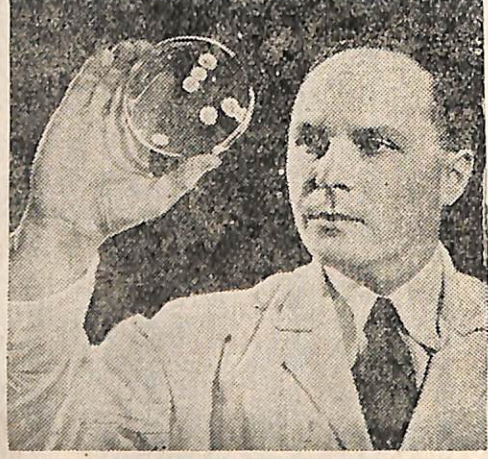
J・D・ラトクリップ

最近、アメリカではクロロマイシテインという驚異的な新薬が発見され、醫學界を震動させている。この薬は今まで満足にいく醫學界がまったく存在しなかつた發疹チフス、恙蟲病、腸チフス、ロツキ- 遼山斑點病を百パーセント征服してしまうという、明るい希望を人類に投げかけた。

醫學の驚異クロロマイシテイン

ペニシリンに次いで発見され
ペニシリンを凌駕する特効薬

ボリヴィア(南米中部)のアルティプラノ高原に蔓延してきた。この地方はその名の示す如く海拔一四、〇〇〇フィートもある高原地帯で、何時も強い風に吹き曝され、荒涼として人跡稀な所である。發疹チフスは、ロシヤを征服せんとするナポレオンの野望を挫折せしめ、また、第一次世界



クロロマイシテイン試験中のジョン・エー・ワイツ博士

大戦後、三、百萬ロシヤ人をこつそり、あの世に送りこみました病氣である。このチフスは虱によつて傳播するのであつて、われわれはそれを水によつて傳播する腸チフスと混同してはならない。さて、プエルト・アコスタという小さな町で數十名の人々が目の眩むほど